

勝林寺報



「いただきます」
「ごちそうさま」

幼稚園に通う孫の男の子と、久しぶりに町のホームレストランで食事をしました。
ちょうどその時刻でしたので、なかなかテーブルが空かず、やっと席につけても注文のお料理が運ばれてくるまでかなりな時間待たされました。その待たさきやっとお料理が運ばれて来ました。

「さあ、いただきましょ」と、ぼうやを促しながらわたしもナイフ・フォークを取り上げました。

ところがぼうや、お手てを合わして「いただきます」って、おおきな声を張り上げます。わたしは一瞬びっくりして、あたりの人々を見回しました。

家では誰もが日常していることです。だのにこんなレストランでこんな大きな声でやられたのでは、恥ずかしい。そんな思いがとっさにわたしの頭を占領して、それで外聞が気になった訳です。

平気なそぶりで無心に御馳走をほうばつてている男の子を見ているうちに、だんだん大人の外聞ばかりを気にして生きている私が恥ずかしくなりました。

それで御馳走をいただき終えたときには、今度は孫の声に合わせて「御馳走さまでした」と大声で申しました。

幼稚園に通う孫の男の子と、久しぶりに町のホームレストランで食事をしました。

ほんにほんに、まだまだ生きていたかったはずの牛さん、まだ大海原に泳いでいたかたお魚の「いのち」をいいだいて「いただきます」。

お百姓さんや漁師さん、沢山のレストランのコックさん従業員さんを、忙しくせわしく、馳せはしらせた末、いただいたこのお料理に「御馳走様でした」とごあいさつするのに何のはばかりがあるか。

「いただきます」「御馳走様でした」のごあいさつは、無量のご縁への感謝のご挨拶であると共に、いまこうして生かされて生きている私のいのちを確かめさせていただく大切なことはないかと考えました。

その夜の床のなかで私は、何年か前の「連研」で聞いた「ご縁」「縁起」のお話を頭の中で復習しました。

仏法では、「いのち」はたくさん沢山の「いのち」に支えられて生きているもの。無量のいのちのご縁のなかで生かされているものということでした。

恵まれていかされている命に「めざめる」ことを教えてくださったのがほとけさまの教えだし、だれもだれもが共にこの貴いめぐまれたいのちに感謝しあうことがお念佛申すものの日暮らしとおしえていただきました。



一月のことよみ

修正会

但東町以外の初参り
但東町以外の初参り

南浩暉くん初参式
但東町初参り

権代会云
権代会云

代議員会

月一一十一一日 (日)

午前九時半より

「議案書」は総代会後『寺報』
(臨時号)全戸配布します
ので、地区ご討議のうえご出

席ください。

ものの身となる

先月聞かせていただいたテレホン法話のなかで、如来さまの「おまこと」「真実」ということを、親鸞聖人は「イツワラズヘツラワズカナラズモノノミトナル」とお示しくださつて教えていました。

あれを聞いてから一ヶ月余りの間、わたしはこのおことばについてあれこれ自分流に考えて見ました。

ああいう意味だろうか、こうもいただけのではないのかなどと。

ところが結局、『大乗』(この『大乗』という冊子は本願寺から毎月出ています。ご院家さんに進められて三年前から読んでいます)。その『大乗』にのついていた龍谷大学の石田先生のお話で、目が開けたごとくお念仏に出会えたように思いました。

石田先生は「親が子となり子が親となりここに始めて親子の愛情が起ころ」という有名なことばの意味を、ご自分の体験のなかでこう書いてくださっています。

わたしの母は六年前九十歳で亡くなりましたが、その少し前、六十歳近い私を捕まえて、「お前だけを養子にやつて、ひがみはしなかったかと、今までそれはかり心配だった」といつて泣きました。五〇年立つてからも、母の心は、ひとりだけ手元をはなして、他人の家にやつた子の身になつて、案じ通し心配し通しだったのです。それが母親というもの、いつもりもへつらいもない「眞実」だったのです。

この文章を読みながら、私もまた、六〇歳近い私の手を取つて「病氣すなよ」と言いながら死んで行つた九十四歳の母の最後をあらためて偲び、親鸞さまの「い

つわらずへつらわずかならずもののみとなる」とおしゃてくださるお念佛、如来さまのお呼び声のこころをいただかせていただきました。なむあみだぶつ。

たより

ご院家さま、長らくご無沙汰いたして

おりまして、誠に申し訳ございません。

お寒くなつてまいりましたが、お寺の皆様にはおかわりございませんずお暮らし

でございましょうか。

報恩講さまもすみましたが、お参りも

させていただけず、勿体ない勿体ないと

独り言にいい続けてございました。昔、

おおかた一週間お勤まりになつた報恩講

さまのことも思い出されて、とてもお懐かしい気持ちでございました。

だれかが連れて行って呉れましたら、

今なら行けると思いますが、車も丹後の娘のところにしかありませんし、去年か

ら今年にかけて親戚にあれこれいろいろ

心配がございましたりで、言い出しまで

きないまま過ぎてしましました。

だれかが連れて行つて呉れましたら、

今なら行けると思ひます。車も丹後の娘のところにしかありませんし、去年か

ら今年にかけて親戚にあれこれいろいろ

心配がございましたりで、言い出しまで

きないまま過ぎてしましました。



「お蔭さま」と報謝に生きる

赤穂南組 真谷 久美子

何の役にも立たぬ私が一人元気で九十歳でございます。

初めの夫桑次の五十回忌には私一人でお経さんをいただきました。

三人の娘に一度お寺のご縁に合わせと

うございます。

この娘たち、子供のころには、ごたごたあって、ほとんど勝林寺さまの土を踏ませたことがございません。今になってからですが、ぜひぜひ一度、三人そろつて本堂にお参りさせとうご座ります。それを果たしませんと、私とてもとても悲しうございます。

春こそしあつたかになりましたら、あらためてお願い申し上げますので、ご院家さま、よろしくよろしくお願ひ申し上げます。

この機会に致しませんと死んでも死なれません。

毎月毎月『勝林寺寺報』お送りください

ます。ご院家さまのご苦勞が勿体のう

ございます。

これが今のわたしのたつた一つの楽し

みでございます。繰り返し繰り返し何度も読ませて戴きます。

おいおい寒さも加わって参ります。どうぞ御身ご大切にあそばしてくださいま